

天国に一番近い島「ニューカレドニア」は鳥たちの天国か？

～ 熱帯地域の鳥類保全の現状と課題～

企画者：中原 亨（九州大・院・システム生命）

ニューカレドニアは南太平洋に位置する熱帯・亜熱帯気候の島国である。ニューカレドニアは古代ゴンドワナ大陸の断片であり、8300 万年前（白亜紀）にオーストラリア大陸から分離して以来、大陸とは隔離されている。古い歴史を持つこの島には固有種が数多く生息・生育しており、鳥類では飛べない鳥カグーをはじめとして 21 種の固有種が確認され、その多くは興味深い特徴や生態を持つ。

このように豊かな独自の生物相を保つニューカレドニアではあるが、外来種の侵入やニッケル採掘、山火事や牧草地開発などによる森林破壊によって、多くの鳥類の生息域や個体数が減少している。コンサベーション・インターナショナルによる「世界で危機的状況にある森林ホットスポットランキング」で 2 位とされているように、現状は世界的に見ても深刻である。このような危機的状況を打破するためには、生息する鳥種の行動特性や生息地選好などを明らかにし、生息適地を保全する必要がある。それにもかかわらずニューカレドニアでは研究者が著しく不足しており、保全の基礎となる生物の基礎的な情報も未だ解明されていないものが多い。

そこで、托卵鳥の研究をきっかけに現地調査を開始した我々の研究チームは、2011 年よりニューカレドニアにおいて鳥類の基礎生態や保全に関する研究に取り組み始めた（現地での様子は鳥学通信第 35 号より連載中）。本集会では、現地で行ってきた研究を題材にして、ニューカレドニアの鳥類の生態と、おかれている現状について紹介する。また、カグーの調査・保全活動に長年携わってきた Jörn Theuerkauf 博士を招き、近年明らかになってきたカグーの不思議な生活史と、実際に行っているカグーの保全活動について紹介する。これらを通して、研究の進んでいない熱帯地域において研究者が鳥類保全に参加することの意義や海外で研究活動を行うことの魅力を感じていただきたい。

【内容】

「ニューカレドニアの歴史と鳥類相」

上沖 正欣（立教大・院・理，学振特別研究員 DC2）

「2つのスケールから見た固有種と広域分布種の棲み分け ～オウギビタキ属(*Rhipidura*)の場合～」

中原 亨（九州大・院・システム生命）

「絶滅寸前の鳥 オオミツスイ(*Gymnomyza aubryana*)の生息地予測」

岡久 雄二（立教大・院・理，学振特別研究員 DC2）

「Social organisation in the Kagu of New Caledonia implications for conservation」

Jörn Theuerkauf（ポーランド科学アカデミー）

コメンテーター：上田恵介（立教大・理）

江口和洋（九州大・院・理）